〈対談〉

北壁を攀る（マッターホルン）

東京女子医大山岳部遭難隊員
今井通子
聞き手
椿八郎

椿 ふかし、われわれのウインター・あがーの特集中に、この冬、アルプスでも厳冬といわれているマッターホルン北壁を女性のパーティで初めておやりになった今井さんに遭難事件のようすで、お話をせたいというわけなんですが、まず今井さんの登山歴から伺いたいと思います。

今井 私は生来ごく在にのとおり父が山好きでしたので、小さなころから父に連れられて、箱根とか八ヶ岳あたりは行っていたんです、本当の山歩きは大学（東京女子医大）に入ってからです。

椿 大学には、山岳部があったんですね。

今井 はい、一年のときから山岳部に入りました。日本アルプスなんか登るようになりまして、結局ほんかでずっと最年長に近い年齢が出てくるんですね、で、こういう仕事も必要なんじゃないかと思い、私が学部の三年になりましたとき、岩崎の技術も少し身につけてみたんです、かっているうちにすっかりそれに乗っちゃって（笑い）、どうも、嫌っ性らしいんです。

椿 それでは岩登りの技術や思想の技術はだれに指導していただいたんです？

今井 そのころ日本で欧州への遠征がはやってきて、最初は田部井さん、アイガー北壁の初登攀やりました有、その年、アイガーは日本人が毎年行って登れないというのはおかしいというわけで、岩の技術を学んで行った中に、全日本女子隊というのがあったんですよ、その隊の隊員で加藤という方がおられ、その加藤が私も若いし何というのかな、いわゆる——。

椿 加藤保男さんですね。

今井 えと、女の子だというと、普通の人は敬遠して教えてくれないんですね、それがまア世話かったし、全然そういうこと気にもしないで、じゃ私たちが指導しましょうと、そのころかり加藤の下に習いたいような男の子が二、三人いたんです、そういうのと一緒に、じゃあなんていうわけで——。

無鉄砲わらがつみ気なった感じ

椿 本場のアルプスには、北壁にも三つも登ったのがありますね。

今井 アイガー、グランド。

椿 それでね、なぜマッターホルンの北壁を対選びになったんですか？

今井 別にマッターホルンの北壁だけ選んだわけじゃないんですけれども、私たち何とはまいりましたときに、行きたいはよいの年、たくさんこうあげていったんです、そのなかにはまやめて、次の機会にして、ここの岩岡通ときまして、この岩に登れなきゃ、そこへ行ってこの岩に登れたらこへ行こうと、そういうような計画でいったものですから、マッターホルンのときはもうまるこ二十日間、七月十日から七月一ぱいとって行ったんです、その間に一番いいチャンスがあったんです、ただ可能性ちがいいますと、三大北壁っていうんだ一応むずかしいとされているんですけれど、マッターホルンの場合、アプローチがわるいといいとか、それから三つの中では天候もわりあいに落ちついている、そうしますと三つむずかしいとされている中では、マッターホルンが一番可能性があるんじゃないかということになり、それに前に登ったパーティに参加するチャンスも、一番多かったものですから、ルートなんかも詳しく教えられたし、そういう点でもかなり安心できたんです。

椿 ことにアイガーの北壁っていうのは、ただ登るだけで、非常に難儀なもんだそうですね、あれはほんとうに山登りを楽しむ北壁じゃないって感じですね。

今井 ほう北北壁ってなそうだと思うんですよ、もう雨しょっちゅうあれを見ちゃっていたものはあるんですね、マッターホルンにたまにはあるんですけど、岩がもろいんでしょう。

椿 あるらしいですね、岩がもろいんでしょう。

今井 ええ、何っていうのかな、崩れがおちが多いんだと思ってです。

出発前のトレーニングと準備

椿 出発前に何かトレーニングをほかにおやりになった？

今井 ええ、去年の四月くらいかな、もう本格的ふんそういうのをやりまして、準備にかかっていたものですから、九月に二ノ倉沢のつい近で朝の三時、あそこを岩山で二人でやったんです、その登攀の前なんかにもスケートをしたり、それから十二月の谷川へ入って、雪の壁とか、それとも一つ私たち「高岸登山隊」というのがあるんです、生理学者の研究」なんていうようなのなんか——。

椿 そういうむずかしいヤツ持ってたんですね。（笑い）

今井 だもんですから、自然現象の研究を

お借りして、みんな被験者というか、今度行く隊員全員の検査を行なったり、それからそういうものを山へ行った場合に、できるかどうか心配でしたので、北海道なんか行って実際にやってみたりしたんですけれども、そんなので半年ぐらいいろいろのトレーニングは随分だったわけです。血圧計なんか巻くのも、寒いとたいへんなんですよね。

槇　胸をまくらなくちゃいかんからね。一ぱい着ているから。（笑い）

寺井　一ぱい着ているから……。

槇　出発前に日本で文献やルートをお調べになったでしょう。そういうものはどんな文献お調べになったんですか?

寺井　きょう持ってこなかったんですけれども、いわゆる日本語で書いたのは、わりあいと少ないんですよ。しかたがございませんので近藤等先生の、まず欧州の山は君にまかせとけ、ぐらいの方ですから、前にいろいろ文献貸していただいて、わからないながらもフランス語、ドイツ語なんかの文献と、手数ったか小西さんとか同志会のパーティの方に、いろいろお話口頭で伺ったり、その程度だったかな。

槇　登攀用の装備は、こちらで準備なさっていらしたんですか。

寺井　ええ、一応こちらで全部そろえてまいりました。向こうへ送ったんですけれども

槇　衣類は——。

寺井　全部こっちで——。

槇　羽毛の——。

寺井　ええ、羽毛入りは日本製のを持ってまいりました。

槇　有恒氏

槇　下着はどんなものを……。

寺井　全部毛です。何か私たちは毛の上にその何ていうのかな、ネッターシャツっていうんですか、着て、もうそれで結構あったかかったし十分でした。夜はナイロンが全然空気通しませんから、上にナイロン着ちゃうような……

槇　それで靴はどうなさったんです?

寺井　靴はこっちで買った向こうの製品です。（笑い）

槇　みんなそれなんですね。どこの、イタリー?

寺井　ええ、向こうの製品というのは、幅が狭いんですね。足幅が向こうの人狭いらしいんです。おんなじ自分の長さに合わせると、幅が狭くてきついんです。こちらでもって足型を送って、向こうでもってその型に合わせたのをこっちへ送ってもらって、その靴を買って、それで向こうに持っていった。（笑い）

槇　テントはお持ちになったんでしょう、下へ。

寺井　ええ、シェルツザイトにテント張りまして、前の日に午後からヘルンリ小屋までとうとう上がりまして、そこで一泊して、午前零時に起きて、二時ごろ出発したんですけれども。

槇　アイゼンはどうなさったんです?

寺井　アイゼンはこちらから持っていったんですけれども先方の持っていったんです。あちらで聞いてみたんですけれど、ちょうど私たちがヘルンリ小屋を登って偵察しているときに、北壁登ったんがいるんですね。詳に聞いてみたら——。

槇　それは外国人ですね。

寺井　ええ、スイスのパーティーです。部分的に雪のコンディションがいたしてよくないということです。雪といってもあんまりあみたいなもんじゃないし、むしろ岩と雪の間ぐらいのためのアイゼンのほうがいいだろうということで、向こうでアイゼンは一番いいよ、というのは、グリベルなんです。それでグリベルのアイゼン買い直して、そのアイゼンつけて登った。

槇　ザイルはこちらの持っていらしたんですか。

寺井　はい、全部こちらでございます。東京製綱のザイル持ってまいりました。

槇　釘なんかは持っていらっしゃらなかったんですね。

寺井　一応一揃持って、もし乗り越せない場所があると困るから持っていったんですけれども、結局使いませんでした。

槇　ハーケンは、持っていったハーケン、お使いになれたですか。

寺井　ハーケンがやはり和製のハーケンがあまりきかないんですよね。あちらでちょっと買いまして、アイス・ハーケンはあちら製のが、かなり入っちゃったんですけれども、アイス・ハーケンはむしろぐずぐずの雪だし、向こうのハーケンよりも、日本のハーケンのぐにゃぐにゃ曲がるのがよかったんですよ。向こうのハーケン厚くてブスッて入るけど、そういうブスッて入るハーケンだと岩が割れちゃうけど、ここのものは柔軟性があるから、そのほうが動かなくて、和製のハーケンもわりあいと使えました。大体ロック・ハーケンが八枚ぐらいとアイス・ハーケンが十枚ぐらいだったと思います。

寺井達子氏

槇　ねじ込みハーケンというのが、あるそうですね。

寺井　ええ、コルク抜きみたいの——。

槇　あれ持っていらっしゃんなかったです?

寺井　ええ持っていきましたけれども出がそうかたくなかったもので。何ていうのかな、（テーブルの上の袋を使って）こういうかっこうしたハーケンなんですね、で、こうスポッと入ると締めて、引き張るような形になって、そういうハーケンのほうが良かったですね。使う場合は。

槇　それは向こうでおそろえになったんですね。

寺井　ええ、あちらで買いました。

食べる間もない重労働中

槇　非常食はお持ちになったんでしょう。

寺井　はい、持ってまいりました。

槇　どんなものお持ちになったんです?

寺井　その前にメンヒへ行って——。

槇　そうらしいですね。メンヒのルートはどこからいらしたんです。

寺井　あれはユングフラウヨッホから、一般ルートをずっと——。

槇　そうすると電車でヨッホまで行かれて、インターラーケンから。

寺井　ヨッホからに回転ずっと歩いて——

槇　縦断歩いたわけですね。

寺井　そのときに何かみんなが、ものすごい暑さでなんかになっちゃったんです。高度順応性なくて——。

槇　あっ急に電車登っちゃって、それですぐ運動に移ったからね。

今井　四、〇九九くらいなんですね、メンちゃの高さ、ですからたいしてあれなんですけれども、みんなもう疲労、仕事疲れなんかしてのでなんかはかわくし、ひどかったものですから、まっそれこそキボスなんかにゃないけど、鉄道用ですね、あれがまず嬉にあったし、それとおなかこわしたりね、なんかしたところで、一日行って帰ってくるんだから、下痢治療すればいいなんて思って、あと薬の手当に救急的なものをちょっと持って、その程度ッ…。あとのようなんて本的医療器具ですか、あれを持っていったんですってもちろんな薬もたかったし、必要なかったですけれども。

聞　研究所員は、お医者さんメメムンやへんれて持っていったんですか、そうなってて一緒ルートから持ってった？

今井　私たちは、エーカーゲーとそれからドゥルマッタはかって、ドゥルはかって、あとブルート一種今って、ハルン一種かったんですけれども、この場合ハルン一種とブルート一種、この行動中にその施設からけっきって、エーカーゲーは荷物が要りますね、ですからシャタルクゼーに置いといて、でシュタルクゼーではかってから出かけて、帰ってきてからすぐまたここではかった。

聞　自分で自分で持ちになった食糧は、

今井　何かビスケットみたいなものとか、あちらのサッツがねあいと――何というのかなアレンズですか、ニコちゃ――あっますね、あれを持っていりました。

聞　それはすっぱいんですか。

今井　ええ甘すっぱいそしてアンズ、よく日本だと干しアンズを使いますけれども、あれよりむしろ日っぽくしてって甘ったるくないから、本飲まなくて済むんです、干しアンズとビスケットにチョコレート、それくらい――あとはコソソメの素小っちゃいあれありますね、あれとあとメルミルクと紅茶のパッタラ、まず飲みものがおもなんです、それと向こうにオゲルルティールというのがあるんです、

聞　それは何です？

今井　ココアみたいなんだけど、麻薬剤だろうなんて子よね、カフェインが強いんじゃないかって思うんです、ココアみたいな感じの飲みものなんです。

聞　それは麻かなんかで――。

今井　ミルクで溶くとおいしいあるんですね、こうやっていっつくらいだけ、オゲルルティールというとミルクが出てきてね、何だろう、粉のインスタントコーヒーみたいなオゲルルティールが、袋に入って出てくる、それをポッと入れてね、かき混ぜて飲む、まず向こうでは一番的な飲みものらしいけれど、それを少々持ってきましてしょっちゅうなかった？

今井　ヤギミルクなんていうか持ってたんですけど、やっぱりあんまり食べなかった。（笑い）

聞　食べたくないんですか。

聞　何か飲んものはかりかりで。

今井　もっと長い時間じゃないから――。

今井　あちらの方は乾燥中、ほんと暑い上がりませんね。

聞　食べたくないんですか。

今井　ええ、食べる時間も惜しんで歩っちゃって、で、上へ行っちゃってからとか、帰ってきてからとか。

話は変ってスイスの羊

聞　ドゥルマッタでは農家にお泊まりになりたて、テントでお暮らしになったんですか

今井　ドゥルマッタからーグルゼーに行きますね、シュタルクゼーにレストランと食堂兼ムたいのあったんだわと前かドのほうにあって、そのそばに湖があっていいところだから、そこへテントを張った。そうしたら毎日お客さんが来るんです、あそこおっちゃんおばあさんが一ぱいテーブルで上がってきて…

聞　上がってきて見物にまるわけですね。

今井　それが見るところないしね、何かすぐテントに泊りにきて泳っちゃった。

聞　それでどこは良かったですね。

シュタルクゼーのテントでの一行（右端が今井氏）

今井　はいそうです、ずっと良かったー。

聞　その食糧はどうしたんです？

今井　三日に一度ずつメルマッタへおりちゃ新鮮なんか買ってきて。

聞　その基地のテントには、だれとだれがいたわけなんです？

今井　結局うちの大学の下級生で今度行った小原と吉田が留学生でおりまして、あとNETがクリルとりにきて、NETの方が二人と、朝日の河合さんとおっしゃる特派員の方が第来第下にいらして、NETの方と朝日の方は、何でいうのかな？、レストランもお昼見たいなところにお泊まりになってうちの二人はテントにいた。

聞　テントの生活は、疲れないですか、

今井　だれもちっとそうでもないんです、それに本当に元気がよくて、意味しまして、何でいうのかな日本でテント張ってね、一ヶ月もいるようにのびのびしちゃって、それこそ、ノイローゼにもならないと、神経痛でも起こるんじゃないかと思うけど、そういう感じにゃなくて、ありありですからほんとそういうあれがなくて、何しろ羊が暖かくかも重なるのでいいちゃった。（笑い）

聞　メメムメ鳴きたがる。（笑い）

今井　羊の群れが、もっぱいいるんです、気候がよくなると上からおりてくるんです、で、気候がよくなると上がってくるんです、で、気候がよくなると上がってくるんです、カランカラン――。

聞　カランゼというんですね、牛はこんな大きなのをつけているでしょう。

今井　そうなんですね。

聞　それで何かくわって、ねだりになるわけですか。

今井　だったらは外国は全部気候って違っていたんですね、気候ってすごく違ってないところ、ムームーなんきて、食べちゃう。（笑い）牛なんか食べないんですよね。（笑い）

聞　もっと上手のもんとしゃべりたいと食べないんです。（笑い）ドゥルマッタで生活っていう間に、お部屋は何でしたっていたんですか。

今井　ええ、一応ってのは非常にお気安がよくって、次の日もお気安がよくって、十二日の日にそれではというので、ハルツーに戻りました。

ニャプランとられた四人小屋

聞　普通のルートお泊りになったんですか

上まで？

今井　えええ、これを金員七名で乗ったんです。北横が見えるところが下に二ヶ所と、上へ行って、二、三ヶ所あるんです。小屋で一ヶ所見えて、で、見たらなるべくいろいろに、こうをスイスのパーティが登ったんです。ルートが決所にところ登っているんですが、まって、夜は非常に早かったんで、結局ここで一泊になったんです、結局。

聞　帰りにアルペンで？

今井　（ルンリー）私たち帰って来ったんですけれども、二時ごろかなアルペン小屋について、もうきょうは疲れたからなんてね、朝おこ時なんですよおるのが、で、ここで泊まっていたんですよ、そうしたら夜中の十二時に……。

聞　おりてきた？　上に登って、普通のルートおりてきたわけですか。

今井　ええ、おりてまいりました。じゃあ一緒に帰ろうよいうことで、一緒に帰ってきた。

聞　あっ夜中に——。

今井　いや、そうじゃなくて、その次の日に、（笑い）そうしたらびっくりしちゃったことは有、このアルペンの小屋というのは無人小屋なんですね。

聞　番頭と女もいますね。

今井　ちゃんとテーブルなんかあって、ちゃくらいの感じかなて、五人ぐらい寝られる二段の寝台があるんです、マットもあるとも毛もあるんです、だけど無人だからただだと思ったわけなんですよね、ここ帰りてきて少しとへきたなね、おまえたちはテーブルイトだったから、きのうはあそこで泊まったろうっていうわけなんですね、（笑い）だからツーレイトじゃなかったけど疲れたから泊まったんだといったんで、そうしたらね、ああそうか、そいじゃどうんで、うしろからスーッと抜出したらね、一人につき二ドラランというんですよね、（笑い）千六百円くらいでしょう、私たちホテルに泊まっても、まヤヤラランどまりたんでいってたから、びっくりしちゃってね、それで悪いお金ないっていったんです、下の天幕いけばあるというたらね、じゃあ泊まったら持ってきてもいいけどもね、もし持ってくんのがおそかったらね、自分で取りにいくっていうんです、取りにいくとヤラランあるんです、（笑い）しょうがなくてかきあてて、私っちゃったんです。

聞　一人二ヤラランの取られる？、スイスのフランがこれまた高いんですよね。

今井　そうなんですね、大体八十五円くらいか。

聞　そういうこともこと聞いておかなくちゃいけんんですね、（笑い）

今井　びっくりしちゃって——、天幕張ったパーティと一緒にまゲ、無理におりてきて天幕でじゃなくていって、お番頭をこちらうしたんですね、彼らは何かまずそうな顔してまして、じゃあ一応いろんなことを聞こうというので、北部の様子とか聞いて、そうしたら天幕はいまいけんども、北部はグッとせはあるけども、パスまではないということをいってたんです、でもまだ二時ちょっとだったろうというわけで、その話聞いて、良いったときに、四ようち出まいかまそいたところから、また、天幕張ってかっちゃったんです、下のクルマットなんかおりたらして、彼らに聞いたところがグリルのアイゼンがいいよね、まっいわれたもので、じゃあ買物を少し考えようなんていうんで、それで一泊泊かな、五日ごろにたって結局、一泊天候が悪くなって、上が一度もく全部雪に埋もれて、それがまた天候がよくなって開けて、山出ていてそれで天幕のほうは北部谷山にまかせて、というようなこと——。

下を見てかっかり

聞　それでいよいよ本番の登攀ですがね、（ルンリー小屋から入ったんですね。

今井　はい、そうです。

聞　ここは雪渓ですか。

今井　そうです、ここ全部ラバースしたところ氷河というのが氷河です、ここのところでちょっと岩場の間に、上の氷河が大きく落ちてきて切れて、その切り口もあって、それで下の氷河があるんですね、段になっているわけです、この段が難所ですから、岩と氷河の間のいちばんだけ見つけた時つて、この上へ出るわけですね、またこっちが岩場なんです、これまたずっと岩場で——。

聞　これはちょっとアイゼンつけたんですか。

今井　はい、もちろんのルンリー出てからちょっと岩場出て、ヨクール出て、すぐもうアイゼンつけて、それからアンザイレンしてしまいました。

聞　アンザイレンは二人だけで？

今井　はい、この二人だけで、で、他まで

まず比較いいからというんで、出発したわけですけれども。

聞　じゃあアルペットいる間に、南壁人のクルーターというものには、相談しなかったんですね。

今井　ええ、あんまり——、あの辺のガイドの方というのは、何っていうのかな？、ものすごくうまいんですよね、ここを登るのは、早いと、もう六十くらいのおじいさんがいるんだけど、毎日登ってんのね、見ていると。

聞　毎日ね、案内して？

今井　ええ、五日間四日はなんていって——

聞　お客さんを連れて ね。

今井　ええ、でも北壁というとね、何かみんなだめ、日ふさいじゃって、そのかわりまケ登っておりてきたときは、ものすごかったですよね？　ナー／アンジェリーなんていってこんなに登ってのかれちゃって、びっくりしちゃった、（笑い）

聞　登ってはってたにひげづらオ？　つけられちゃうかね？（笑い）

今井　それでルンリーのおじさんもね、ルペー泊まったっていうのね、ナナランていって、（笑い）まけてくれたんです。

聞　天候の知識は、どっちと連絡してたんですか。

今井　えええ所のあれっていうのは、そういう点ずっとくるできているとおっしゃんですけど、パヌメーターがあるんです、温度計と気圧計と四かっていますね、青になったら赤になったりとかってテルマットにもそのパヌメーターがあって、天候きそうはいいだろうか、悪いだろうというの見ていくとわかるんですね？　何かこんなんで動いていて、下がったりするから、ああこれはきっとはこわだな、大体六八〇ミリバールは出ったら、まず晴がつくんですね、ルンリーの小屋にもパヌメーターあるんですけどもパヌメーター見て、あ三長期予報は、世界気象局とかというのがあるらしくて、朝日新聞の方に頼まれてもらって聞いていただいて、あとは新聞見て——、向こうの新聞わりと出やすくて、お天気はおひさま出てあってね、雪は雪が書いてある、ずっと地中海のほうから全部書いてあるんです、そうするとちゃんと前後なんかの書き方は、全部日本と同じですから、行く前に『岩人』だかなんか山の雑誌に、「欧州の天気予報の見方」なんていうの

同い中滞中電灯の光で全部登って、この辺まできたときそんな夜が明けてきまして、また東岡の鞍のところから今度、ここが四〇〇〇メートルの下部岩田屋というんですけどね、この岩田に出るところ、ちょっとかぶりぎみなんです。

柳 それは東岡ですか。

今井 ええ、東岡です。そこをピッチルでホッチィングして登って越えたところがハチミッと全部岩壁が見えるんですね。

柳 あそこまでね。

今井 びっくりしちゃったんだけど、それでそこを一生懸命登って、この辺に九時ごろ着いたんです。この辺に着いたら今度また、これまっすぐになってますけど、横行って上がって、横行って上がって、横行って上がって。

柳 ジグザグに歩いたわけね。

今井 で、岩と雪とかわりばんこぐらいに出てくるんですけど。

柳 それを全部アイゼンつけたまんまで?

今井 はいそうです。上から下まで全部アイゼンつけて。岩場はわりあいやさしいから、アイゼンつけても登れんですけど、先がむずかしいから剥ぐわけにいかないんですね

柳 それでここを、どうしてここへ帰ってきたんです?

今井 一回ここへ夕方の四時ごろ着いたんです。ここが九時ごろでここへ四時ごろ着いた。

柳 ずいぶん時間がかかったですね、ここ。

今井 ここから下見てびっくりしちゃった（笑い）すぐ下に見えるんです。これ四時に着いたんですけれども、時間が長いからん時ごろになると、夕日が沈むんです、あそこ。九時ごろまで明るくて、十一時ぐらいになるとまっ暗になるんですけど、だからまだ時間があるんですから、少し登ったんです。四〇メートルザイルで三ピッチ登ってまた上に行ってみてたなあったなそうなのほうがいいから、全部斜めの稜線で何にもないんです。

柳 ここはたなのあるんですね。

今井 ここだけ何かすごく高い、（雪原したところから岩壁の端まで一・五メートルぐらいのところを落として）その辺かなこの辺までぐらいのたながあって、ちょうど煙突の壁がうしろにあるんですよ。だからよっかかんにちょうどいい。それでもうみポーッと前れてますけど。

柳 それは岩ですか。

今井 岩です。で、昔と水が固めた塗ってたんですけど、それも全部削って取って、ここすから上へいったもののもう六時過ぎちゃったんです。しょうがない下降しようというんで、おりてきてここへ着いたのが八時ごろです。ハーケン打ってそこへザイルで自分のからだを組んで、ゼルトの袋に入って、九時ごろまでお茶飲んだりなんかして、十時ごろに寝たかな。

柳 ここから見た夜景はどうなんです。

今井 下が、ヘルンリーの小屋とかそういうのは、陰のこっちになって見えないんです

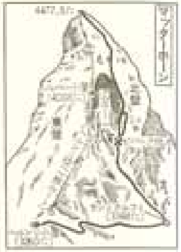
柳 ツェルマットの町は?

今井 ツェルマットが見えるんです、それが、すごくいい月夜だったんです。満月に近くて。すわってすぐ上にこう谷がまっ暗になってて、その中にチャチャとこう町、ツェルマットが小さくかたまっていて。村っていうのかな、ツェルマット、町の中をとおってメイン通路が一本こうあって、電灯ってまだ二、三本あって、これだけなんですね。あともう一つの辺にチョコチョコある。だからちょうど星のとり電気がついているんですね。

柳 自分たちのツェルトは見えたんですか

今井 いいえ、見えません。それは。

雲の中にそびえるマッターホルン



柳 みてってね、下の連中は寝っていくのを、望遠鏡で見ていたんですか。

今井 はい。全部見てたそうです。夜は暗くて見えないけど。

たなから落っこちたカメラマン

柳 ここでは食事なさったわけですね。

今井 ですからビスケットちょっとかじって、あと紅茶飲んで、スープ飲んで、その程度です。

柳 ここで泊まったときに、写真とった連中も、ここへきたんですね。

今井 ええ、一緒に上がってまいりまして一緒に泊まって、私たちすわるところが一つあって、あと向こう側にもっと一つ張り出したところがあったんです。カメラマンの里山さんという方が、そこへこう寝ちゃったわけですよね。夜中に一回おっこったんだって—

柳 寝ている間に。（笑い）

今井 おってもちゃんと確保ついていたからね。だいじょうぶだったですけどね、いびきかいて寝てるんだからびっくりしちゃった。

柳 よっぽどよく寝ちゃった。そこで、ここで泊まりになってね、あくる日は何時にお登りになったわけですか?

今井 六時ごろまでぐずぐずしていうのはね日過ごしてしまいましてね、何かヘルンリーの小屋で、ステーン・オオとかなんかどなられたんですよ。こっちへもうたいでいに二時ごろ出るんですよ、ヘルンリー経由登る人が。で、もう五時ごろには小屋へ着くわけですね。頂上は大体七時ごろで、この辺をもう十二時までには帰ってきて、二時にはここへ着くんです。そのコースが。

柳 午後の?

今井 ええ。大体そういうことになってますけれども、それはその人たちが、ちょうどもうここまできていたわけですね。六時に。ところがここで何かまだ寝てるやつがいるから、何とのんきな!というわけでしょうね。向うとしては。（笑い）二、三度どなられましてね。目がさめてしょうがないから手袋つけて、それからあわてて靴はいて出たんですけれどもまずここは昨日ザイルへ出してきていた。ですから、パチパチパーと登って、ところがこの上がまた大グロワールという嫌なたんですよね。そのクロワールの中は、いつもしい雪と岩のミックスで、ところがその先もう私たちが起きたときに、この上側のほうに二人、きょう登ってきたパーティがいるんで

すよ、びっくりしちゃってね、鼠がもう見えるぐらいの近さまで来てるんです、結局向こうの人っていうのは、水官社者赤実にいいわけですね。日本人と違って、で、私たちのカッティングの仕方あったし、素晴らしかったと思うけど、この辺のチャンネルあたりで、その人たちと一緒になっちゃって、結局上部の官庁に出たりまた戻ったり、私たち常と言葉いし、彼はまっこうちのほうが強いんだけれども、それだもんですから、ここで捉かれちゃって、上部は上部組織という名前なんです。ここが、三段くらい、まっすぐ正確だと聞いてったんですね。手の人たちにも、だから上部組織はライイイ使われたりという風があったんですよ早く着くだろうと思ってこの辺ゆっくり行ったんです。そしたらここが全部出たったんです。それも何か新宿ね。ファーストなとこ岩についてい、ナイゼンはきみないし、もちもちよっと乗っかればすぐもしで、すごく気つかっちゃって、いつまでたっても……。

穂　この辺には、深呼ヌイルはないんですか。

今井　何にもございません、こっちのヘルンター周辺にはいっぱいある、こんな大いのが十何本あるみたいですね。

穂　そこで言葉しちゃったわけですね、それでそのあとかなた辺は、どこの連の出ったです？

今井　オーストリーの方です、彼らもかなり大きなルートを登った人たちなんですね、あっちの人は結人方がうまいんですよ、本に強い人と岩に強い人がペアで組んでて、本官の部分はパーティと本に強い人が行って、岩が強い人は岩をパーティと行って、まず登道ったりもしていろいろなところはかわりばんこにというような、そういうところすごくうまくて、やはり私たちなんか両方とも本は強い岩ならまだいいけれどなんていうばっかりで、（笑い）日本にはないんですからね、本が。

穂　そういうものがないからね。それでこの上へ行くと、イタリー側の死線とヘルンターの死線とが一緒になるところがあるらしいですね、狭くなっていって……。

今井　最頂までに一緒になるらしいですね。山頂がこうなっておりまして、こっちがフランス国で、こっちが側がヘルンター国で、ちょっと両方が高いんですね、耳みたいになって、まんやちょっと盛頂になってて、で、こっちがスイス側頂上で、こっちがイタリア側頂上、

穂　この間に何かクレーンかなんかあるんですか。

今井　いえ、これはもう完全に老朽化しちゃってる。

ナイフの刃のような頂上

穂　この死線の頂上は？

今井　頂上には何にもないです、ナイフの刃って、そんな感じのところです。

穂　それにもイタリーの頂上とかも、自由に行ってこられるんですね。

今井　えっ、行かれますそれは。

穂　そのまん中に、あの十字架が立ってんですね。

今井　いえ、イタリー側の頂上に十字架が立っている。

穂　あっ、イタリー側には立っているんですか。それでここ登ったときに、イタリー側のその十字架ごろんとしたんだしょう？

今井　それがね、フィルムやなんか下からずーっと見るわけですね、ところがこの辺ちょっと煙霧ちゃってるんですのでね、私たち流れちゃって全然見えないんです、イタ

ーの頂上、特に自分たちがスイス側の頂上へ出たんで、出るまで見えなかった。

穂　あっ、頂上へ出出すまでね。

今井　あせってしまいましてね、いつまでたっても頂上がないっていうわけで、（笑い）でも下で見ていたNHKの方たちは、もうみんなカメラが出用見えて、特に頂上の十字架と私たちのいる時間というのは、ほんとうによくわかっていたらしくて。

穂　それでここの頂上に着いたのは何時ですか、八時だってすましたね。

今井　えっ、午後八時。

穂　まだ明るかったですか。

今井　えっ、まだちょっと夕日が沈むとき。

穂　それじゃきれいだったでしょうね。

今井　えっ、すごくきれいでした。夕日がものすごく赤くて、で、もうそろそろ天候くずれはじめたんですから、下に黒い雲がきて、雲海がもう雲海を飛ばしてきましたから。ですけどもこちらはもう何じゃ、早くきょうおりないとなんてね、あせってたものですから、上に十五分ぐらいおりまして、すぐ下へおりてしまいました。

穂　あそこへ登った途中のいろいろ記録読んでみると、遭難されていった途中は、早く進ってお茶飲たいっていうこと、みんなそえるらしいですね、喉が渇かちゃうんにゃないかと思うんですね。

今井　何でいうのかな、日本の山というのは上まで行きますと、あとは死線道ですね、で、もうそこで遭難者したら安心できるんですよ、それがこっちの山はこれヘルンター死線というとも、遭難するの絶ないんです、あっ、これ？　なきゃなんて、（笑い）

今井　それも驚くこっちゃうんんてきたら、変ってこっちゃったんって。

岩場の名人——かるしか

穂　登頂中に一番困難だったお記憶はなんですか？

今井　まっ全体的にその岩っていうのかな？　岩がかたくてしかも——、いわゆるB米じゃなれてないから、ナイゼンのどれくらい入ったら安全かないうのが、よくわかりませんので、過度に神経使いましたし……。

穂　そういうことはみんな日本で経験できなかったことですね。

今井　そうなんです、結局日本にそういう

チョンバーガからもかすかにマッターホルン登頂(1869.2.3)

氷河というものがあればいいけど、ないですから、それとあと岩場はまアかきしかったんです。むしろいってみればほぼ日本の岩壁なルートとも、だから問題というほどはあまりないんですけれども、いわゆるハングリーがこういうふうにかぶってまして、北壁がえぐられた形ですから、ここ登っている人が落とす落石というのが全部こっちへ来かしてくる。

樋 ハナー北壁ね。

今井 それに風でも吹けばどんどん落石があるし、するとひどいことに、かもしかが二頭いたんですね。それが私たちの頭の上の岩場をバターッと通ったりね、バタバタバターッなんて……。

樋 そんなところを夜に歩くんですか、かもしかが。

今井 かもしかというのはいやですね。彼はへたなんですって、知らないけど、で、彼は非常にようすで——。

樋 これもちょっとかの絵があるんですよ、実にとこ飛んでいる絵が。

今井 すごく岩場はこわすぎね、バターッと平気でやってね、こう——。

樋 落としてっちゃう。

今井 それがこ頭もいたんでね、もがすごい落石に当あったんですよ。グランデルサルで氷河の真ん中をに行ったんです、そうしたら氷河の真ん中のところにこういう岩の塊があっておそれ岩場だったんですねずっと横音みたいになって、そこを例えば高さ三メートルもしかが、ちょうど両側通えてこっち側へちょうどきたんですよ、私たちがここにいたけれども、ふだん人のいることもないんでびっくりしたらしいの、バターッと飛び越えて向こうへ行っちゃったんですけれども、びっくりしましたね、そのとき、こんな小さな岩のスタンスが、こう出ているところへ四つの足全部乗っけて——。

樋 器用者みたいに。(笑い)

今井 驚きましたね、あれには。と次の瞬間ボターッと飛んで、私たちはんかそういうところすべりもしますよ、出はまた、手と足とんなかって行くところをね、スポーッと乗っかって、またはっンピョンピョンっって、彼はものすごくしょうずもしいですね、かもしかは(笑)にもんですかっていう感じの危険さ、それから不安定な岩だから、もし一回目分のスペスタッフしたりすると、たぶんとまらないで下までおっこちるだろうという不安とか、まアそのほうが強かったと思います。

樋 それでっぺんもスタッフしなかったですか。

今井 ええ、スタッフはもう全部二人でしなかったです。

樋 ビバークも楽しかったですか。

今井 ええ、それが非常に元気についてて、気つかい無だったものですから、私はキー非常でしかなくて、ただ羽毛のコートだけだったんです、で岩田さんは羽毛のコート持ってたからいて、キーターだけ持ってって、だけども同様とも全然寒くなかった。

むしろあっけなかった北壁

樋 登頂中、女性特有の問題なことというのは、何かありましたか。

今井 別になかったと思います。私たちはおるときにはいろいろかな女性ということもあまり意識としないでやっていたから、あまり感じなかったんですけれども。

樋 だけどトルコなんか困ってしょう。

今井 ええ、でも登るとき非常食べないし飲まないで、だから全然やっぱり飲まなきゃ出ないし。(笑い)

樋 女性は体重が比較的軽いですからね、足場なんか楽に歩けるんじゃないですか。

今井 まアそれはあると思いますね、たとえば、たいていが日本でもそうだけど、私が男っぽくって平気だったりパーティ、次に来る人が男の人だと助けたりする。

樋 助けたりするでしょう、そうだろうと思うんですね。

今井 だから男性でも、登る人っていうのは、大きい人よりね、何かちょっと小さい人のほうがうまいですね。

樋 北壁を登頂する前に、いろいろ計画もしていたんですから、予想は立てになったでしょう、予想と実際とはどうだったですか?

今井 北壁のですか、実すると前の方々の文献とかあいろいろを読んでいったものですから、こう、非常に力がかしい感じたんです、まず第一に、それと使ったものしも好天に恵まれてますから、怪しいなぜかしかったんだと思いますけれども、ですからそういう点で、ちょっと何か、ひょっとあっけなく感じましたこころとしては。

樋 予想だったというわけですね。

今井 私たちは、前のパーティがいていい日本人は、二日三日で登っているわけですね。私たちの一ヶ月前に遭難がありまして、大部の方がなくなってますね。その人たちは四日がかりとまで書いたんですけど、帰りに何か夜後に落ちたんですね。

樋 帰りに落ちたんですか。

今井 ええ、で、四日でいかかってますし、私たちのほう女性にしてちょっとのろいだろうから、二泊三日にプラス一日くらいかかるんじゃないかなァなんていう予想してたものですから、案外ひずかしいところなくてスタスタいっちゃって、むしろ落石がもっのごく危険で、そんな安にところで気を使わきゃなんないっていうので、例えばっ岩にし、予想外だった。

樋 ーつだけ天気ですね。

今井 ええ、天気が非常によかったから。

樋 夜の状況ーーーの「高所登山時における人間の生理的・心理的研究」これは、その北壁はどうだったですか。

今井 一応安全やってきたんですけど、彼は本当はもっとうまくかかないんでと、というのは、みんな心死になってポーター頼てれ、サイキャーターの数なんか多いときけれども、まだ比較してみたらしし、たぶちゃんとルーカーなんかんたら、岩田ノルマルだったんが、たいていアドバタなんか出んですね、だんんまア登頂で特別何ってあるかは、まだはたちょっとわからないんですけれど、意外の先生に聞いてみて、何か知るんじゃないかなァと思って——。

樋 岩場ですが、この次はどんな計画があるんです?

今井 いまはまだ今度の登頂のあと休憩で精一ぱいなものですから。

樋 まだ考えてないんですか。

今井 まだ考えてないんですね。

樋 北壁をこなったら考えようかって思っております、あまり遊んではいかないると、岩場のほうでおこられちゃうし——。

樋 どうも長時間長い間ありがとうございました。